

第5次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物
The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

ダイトウコノハズク

Otus elegans interpositus Kuroda, 1923

澤田明（早稲田大学）・高木昌興（北海道大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会 鳥類分科会



環境省 編

令和8（2026）年3月



特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：澤田明・高木昌興，2026. ダイトウコノハズク. 環境省（編）第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物， pp. 148-153.

Citation: Sawada, A. and M. Takagi, 2026. *Otus elegans interpositus* Kuroda, 1923. In: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 148-153.

ダイトウコノハズク

Otus elegans interpositus Kuroda, 1923

カテゴリー判定結果		絶滅危惧 I A 類 (CR)		B1ab+2ab	
基準 A: —	基準 B: CR	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B1+2. 出現範囲が 100 km²未満かつ生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。 【地点数】1 地点 b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 農業用の土地改良として島内の樹林地が減少してきた。既存の幕林の一部は大幅に伐採され、テリハボクの林への転換が試みられている。しかし、切り開かれた樹林地ではしばしば外来種のギンネムやタチアワユキセンダングサが侵入しそれらの草地または林へと変化している。ギンネム林においてダイトウコノハズクは営巣できず、採餌場所としても適していない。					
評価分科会： 鳥類分科会					

概要

南大東島の固有亜種ダイトウコノハズクは、開拓に伴う大規模な森林伐採により極端に個体数を減少させた。主な営巣樹は移入されたモクマオウであったが、近年の台風で倒木され潜在的に営巣可能な場所が減少している。個体群の保全には、暫定的な措置として巣箱の架設が有効である。

基礎情報

【形態】

全長約 20 cm、体重約 90 g。オスの体重は約 86 g、メスの体重は約 96 g で、オスがメスよりもやや小さい傾向はあるが個体差は大きい。茶褐色から赤茶褐色の羽色で白や黒、濃褐色の複雑な模様を持つ。虹彩の色は黄色。亜種間の羽色の違いは十分に検討されていないが、亜種ダイトウコノハズクは亜種リュウキュウコノハズクよりも小さい。一方、鳴き声の特徴は明瞭に異なり、亜種ダイトウコノハズクは単位時間あたりに鳴く回数が多い。

【生活史】

南大東島に留鳥として生息し、一夫一妻で繁殖する。3 月下旬から 4 月にかけて産卵する。一腹卵数は 1 から 4 卵である。メスだけが約 1 カ月抱卵し孵化する。孵化後、約 10 日間抱雛が行われる。雛への給餌は雌雄共に行う。6 から 7 月に巣立ち、巣立ち後も親から給餌を受け、順次分散を始める。10 月頃から定着し、翌年から繁殖する個体も少なくない。

【生息環境】

幕（はぐ）と呼ばれる帯状の樹林地が主な生息場所である。畑の間の細い防風林や神社の樹林地にも生息する。これらの林に一夫一妻のつがいで 1 年を通して縄張りをかまえ、縄張り内に巣をもつ。主に外来樹種モクマオウの樹洞に営巣する。在来種ダイトウビロウにおける営巣は、僅少である。それは営巣に適したダイトウビロウの枯死木は外来樹種モクマオウに比べて相対的に少ないためと考えられる。縄張り内の樹林地やその樹林地に隣接する畑や道路などの解放空間で採餌を行う。

生息環境区分：	【陸域_平地部】裸地，森林，草地，田地・畑地，耕作放棄地
---------	------------------------------

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域，(7) 島嶼地域
---------	-----------------------------------

【分布域】

南大東島（沖縄県島尻郡南大東村）・北大東島（沖縄県島尻郡北大東村）に分布する。

現在の生息状況

【分布域の現況】

南大東島だけに生息している。かつては北大東島にも生息していたが、近年の観察記録はなく、北大東島の個体群は絶滅したと推定される。南北大東島間は海で隔絶されるが、最短直線距離は約 8 km であり、南大東島から北大東島へ分散が可能と思われる。しかし、北大東島での絶滅から 40 年以上が経過していると推定されるが、北大東島での確認記録はない。

【生息地の現況】

圃場整備に伴う樹林地の伐採で生息可能な樹林地が減少を続けている。現在の生息可能域は主に幅 50 m 程の帯状に島を囲む防風林だけである。2010 年 11 月の大型で猛烈な台風 12 号によりダイトウコノハズクに巣穴を提供する多くの樹木が倒れた。2011 年 9 月には台風 15 号が、2010 年の被害に追い打ちをかけるように大東島近海に長時間滞在した。2002

年から 2009 年までに確認されたダイトウコノハズクの 20 巣がモクマオウの樹洞に位置しており（全確認巣の約 9 割）、その三分の一が 2010 年の台風による倒木などで使用不可能となっている。2020 年 9 月の台風 10 号でも台風によるモクマオウの倒木は多数確認された。

【個体数の現況】

2005 年の個体数は 210 つがい（420 個体）と推定されている。2012 年から 2018 年にかけては期間の長期平均として約 570 個体と推定され、成鳥の性比はおよそ 1 : 1 である。ただし、これらの個体数推定手法は異なるため、2005 年と 2012 年の間で個体数が増加したという解釈は必ずしもできない。むしろ 2012 年から 2018 年にかけての個体群成長率（ある年の個体数に対する翌年の個体数の割合）は 98%と推定され、若干の個体数の減少傾向が認められる。これらの繁殖個体のほかに、縄張りを持つことができない放浪個体も生息している。

存続を脅かす要因

開墾に伴う大規模伐採が個体数減少の最大の要因である。帯状に残された防風林は近年加速された圃場整備で徐々に面積を減じ生息可能域が現在も減少し続けている。ダイトウコノハズクが営巣に利用する在来種ダイトウビロウも伐採されている。また野良猫もしくは飼い猫、およびイタチによる成鳥・雛・卵の捕食や繁殖妨害も記録されている。つがいは経年的に同じ樹洞を巣穴として使う傾向があるが、非繁殖期の秋から冬の間に来種セイヨウミツバチがその樹洞に巣を作ることで、ダイトウコノハズクが営巣に使う巣穴が乗っ取られる事例も複数記録されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，圃場整備，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，圃場整備，交通事故，農薬汚染/化学物質汚染，捕食（外来種による），人工構造物への衝突，気候変動，分布・産地局限

特記事項

ダイトウコノハズクが狭い大東諸島で生息し続けるためには、十分な営巣場所を擁する樹林地の確保が重要である。しかし、現在の南大東島には開墾後に形成された二次林の極狭い樹林地しか存在していない上に、台風や伐採の影響で樹林地の荒廃が進んでいる。大東諸島の潜在極相樹であるダイトウビロウは、台風の影響に対して頑健であるが成長が遅く、二次林においてダイトウコノハズクが営巣できるようなダイトウビロウの枯死木の供給は進まない。移入樹種のモクマオウは弱い成長は早く、営巣できるような樹洞を多く形成する。皮肉的ではあるが、大東諸島への移入樹木モクマオウは、開墾後の土地で成熟したダイトウビロウの林が復活するまでの橋渡し役としてダイトウコノハズク個体群の維持に貢献してきた。ゆえに現状ではダイトウコノハズク個体群の維持においてモクマオウに依存している部分は少なくない。しかしモクマオウは植栽から 80 年程が経過し、樹

勢が衰え台風の影響を大きく受けているため、モクマオウに依存した個体群維持は長続きしないと予想される。ダイトウコノハズクとダイトウビロウという本来の在来種同士の関係で個体群が維持される状況に戻していくために、今あるダイトウビロウをこれ以上伐採しないことは重要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ダイトウコノハズク	<i>Otus elegans interpositus</i>	VU
第4次 2019:	ダイトウコノハズク	<i>Otus elegans interpositus</i>	VU
第4次 2018:	ダイトウコノハズク	<i>Otus elegans interpositus</i>	VU
第4次 2017:	ダイトウコノハズク	<i>Otus elegans interpositus</i>	VU
第4次 2015:	ダイトウコノハズク	<i>Otus elegans interpositus</i>	VU
第4次:	ダイトウコノハズク	<i>Otus elegans interpositus</i>	VU
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和6年度末時点）

【沖縄県】絶滅危惧 I A 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和7年度末時点）

鳥獣保護管理法

参考文献

- Akatani, K., T. Matsuo and M. Takagi, 2011. Breeding ecology and habitat use of Daito Scops Owl (*Otus elegans interpositus*) on an oceanic island. *Journal of Raptor Research*, 45(4): 315-323.
- 赤谷加奈・堀江明香・村上茜・松尾太郎・高木昌興, 2011. 南大東島の環境保全のための啓蒙活動. プロ・ナトゥーラ・ファンド第20期助成成果報告書, pp. 167-169. 日本自然保護協会, 東京.
- Murakami, R., A. Sawada, H. Ono and M. Takagi, 2022. The Effect of Experience on Parental Role Division in Ryukyu Scops Owl *Otus elegans*. *Ornithological Science*, 21(1): 35-44.
- Sawada, A., T. Yamasaki, Y. Iwami and M. Takagi, 2018. Distinctive Features of the Skull of the Ryukyu Scops Owl from Minami-Daito Island, Revealed by Computed Tomography Scanning. *Ornithological Science*, 17(1): 45-54.

- Sawada, A., T. Iwasaki and M. Takagi, 2019. Fine - scale spatial genetic structure in the Minami - daito Island population of the Ryukyu scops owl *Otus elegans*. Journal of Zoology, 307(3): 159-166.
- Sawada, A., T. Iwasaki, C. Inoue, K. Nakaoka, T. Nakanishi, J. Sawada, N. Aso, S. Nagai, H. Ono and M. Takagi, 2021. Missing piece of top predator - based conservation: Demographic analysis of an owl population on a remote subtropical island. Population Ecology, 63(3): 204-218.
- Sawada, A., T. Iwasaki, T. Matsuo, K. Akatani and M. Takagi, 2021. Reversed Sexual Size Dimorphism in the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans* on Minami-Daito Island. Ornithological Science, 20(1): 15-26.
- Sawada, A., K. Akatani and M. Takagi, 2021. Growth Curves of Ryukyu Scops Owl Nestlings, an Owl Species with Asynchronous Hatching and Reversed Sexual Dimorphism. Ardea, 109(2): 1-13.
- Sawada, A., T. Iwasaki, K. Akatani and M. Takagi, 2022. Mate choice for body size leads to size assortative mating in the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans*. Ecology and Evolution, 12(12), e9578.
- Takagi, M., K. Akatani, S. Matsui and A. Saito, 2007. Status of the Daito Scops Owl on Minami-daito Island, Japan. Journal of Raptor Research, 41(1): 52-56.
- Takagi, M., K. Akatani, A. Saito and S. Matsui, 2007. Drastic decline of territorial male Daito Scops Owls on Minami-daito Island in 2006. Ornithological Science, 6(1): 39-42.
- Takagi, M., 2013. Vicariance and dispersal in the differentiation of vocalization in the Ryukyu Scops Owl *Otus elegans*. Ibis, 153(4): 779-788.
- Takagi, M., 2013. A Typological Analysis of the Hoot of the Ryukyu Scops Owl Across Island Populations In the Ryukyu Archipelago and Two Oceanic Islands. The Wilson Journal of Ornithology, 125(2): 358-369.
- 高木昌興・赤谷加奈・松井晋, 2008. 南大東島に隔離分布するダイトウコノハズクの鳴き声を用いた個体識別となわばり個体の入れ替わり. プロ・ナトゥーラ・ファンズ第 17 期助成成果報告書, pp. 161-169. 日本自然保護協会, 東京.
- 高木昌興, 2009. 第 4 章 鳥類「南大東島の鳥類の特徴と保全」. 中井精一・東和明・ダニエル ロング (編), 「南大東の人と自然」, pp. 168-181. 南方新社, 鹿児島.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Otus elegans interpositus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Otus elegans interpositus* is listed as CR under criteria B1ab+2ab.

B1+2. Extent of occurrence estimated to be less than 100 km² AND area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimates indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Bare area, Forest, Grassland, Farmland, Abandoned farmland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Field preparation, Vehicle collision, Pesticide/Toxic chemical pollution, Predation (by alien species), Collision with man-made structures, Climate change, Limited distribution
Law designation status for conservation	Wildlife Protection, Control, and Hunting Management Act.

執筆者:	澤田明（早稲田大学）・高木昌興（北海道大学）
Author:	Akira Sawada and Masaoki Takagi

公表年月：2026 年 3 月